

公開講演会記録

西安で東アジアの多文化共生
を考えた

学習院大学名誉教授 諏訪哲郎



はじめに

2024年8月、長年関わってきた東アジア環境教育ワークショップが西安で開催された。大会のテーマは「多文化融合のための環境教育」。「多文化」

は歓迎したいが、今の東アジアに求められているのは「融合」ではなく「共生」ではないか、という思いから、「西安で東アジアの多文化共生を考える」というタイトルのプレゼンを行った。

この西安でのプレゼン資料を矢吹晋先生にお送りしたところ、「孫悟空がタイムカプセルに乗って宇宙を縦横に

翔び回るような爽快感」を感じていただけで、矢吹先生から「そのプレゼンの話を国際善隣協会の講演会でも」ということになった次第である。

矢吹先生との最初の出会いは、40年近く前のこと。学習院大学で総合講義「現代中国」というリレー式の授業を開講することになり、言語学者の橋本萬太郎先生や中国政治経済研究者の矢吹晋先生らにご出講いただいた。今日の話も、そのときの橋本先生の言語類型に関する講義に触発され、その後、自分なりに情報を集めて構想を膨らませたものである。

西安はかつての長安、諸王朝の都で、日本との関わりは深い。正倉院にはシルクロード経由の文物が多数収められている。阿倍仲麻呂に代表される多くの留学生も長安で学び、律令制度をはじめとする中国の進んだ文化を日本に持ち帰っている。西安の町を歩くと、今日もなお、西域の香りを感じさせられる。大きなイスラム寺院や西域の食品を売る店も多い。シルクロードの東の出发点の遺跡の上には、民営の「大唐西市博物館」が建てられ、シルクロード経由の文物が多数展示されている。しかし、今回の講演で話したのは東

図1 中国語の「歯」の言い方



『漢語方言詞匯』(1995)を参考に作図・赤字を付加

多分、一番よく通じるのは「**牙齒**」。

「**牙**」は、日本語では「きば」だけど、本来の漢字の意味は「**齒**」。

日本では「**齒牙**」にもかけない(無視して相手にしない)」

西の交流ではなく、南と北についてである。西安は東アジアの南北の文化がぶつかりあった地に位置しており、南の集団と北の集団の接触・共生による文化的な活性化が長安という都を作った面もある。

講演の冒頭では、中国旅行中に、突然、歯が痛み始めたかどうか、という問いを投げかけた。

ネットで「**歯医者**」を検索すると

「口腔」と書かれた看板の写真がたくさん出てくる。インプラントの必要はないので、Dentalで検索すると、「牙科」が出てくる。「牙科」は「牙を抜かれる」イメージなので、さらに辛抱強く探すと、「**齒科**」が見つかる。ただし、「**齒科**」があったのはいずれも福建省であった。

中国での「**齒**」の言い方は、図1のように、北方が「**牙**」、福建省あたりに「**齒**」、その中間地帯は両者を重ねた「**牙齒**」となっている。「**牙**」という漢字は、日本では動物の「キバ」だが、北京あたりでは人間の歯を意味する。日本には、「相手にしない」の意味の「**齒牙**」にもかけない」という慣用句がある。

膨大な数の「同義反復熟語」と多文化共生

同じ意味の異なる漢字を二つ連ねる熟語を「同義反復熟語」と言う。「**みち**」を並べた「**道路**」、「**かわ**」を並べた「**河川**」など、「同義反復熟語」はたくさんある。「**眼目**」は、日

本では「**目**」という意味よりも「**大事な点**」という意味で使われている。北京では「**眼睛**」というのが普通だが「**眼目**」でも通じる。「**手腕**」も、日本ではもっぱら「**優れた能力**」を意味する。単独では根元の方を「**腕**」、末端の方を「**手**」と使い分けているが、もともとは同じ意味で、異なる地域での音の違いから違う漢字が当てられている。

「**齒**」と同じように、南北で異なる分布が「**雨が降る**」や「**歩く**」にも見られる。「**雨が降る**」は北京では「**下雨**」だが、南方では「**落雨**」が多い。「**歩く**」に相当する言い方は北方では「**走**」、南方では「**行**」である。これらを並べた「**落下**」「**下落**」や「**走行**」という「同義反復熟語」も存在する。

おそらく比較的新しい時代に北方の「**下**」や「**走**」という言い方が南方に広がっていったのであろうが、力の強い勢力が一方的に他方をのみ込むのではなく、両者を重ねた語彙を作って使用するという、「多文化共生」の道を選んだことを物語っている。

DNAからたどる東アジアの人々の来歴

現生人類は中国大陆にどのようなルートで入ってきたのだろうか。かつては発掘された石器の形態などから移動経路が推定されていたが、20世紀末以降、DNAの分析に基づいた移動経路が描かれている。アフリカからユーラシア大陸に到達した現生人類のうち、最も古いY-DNA Cというタイプの遺伝子を持つ集団は二つに分かれ、シベリア経由で北方から南下したY-DNA C1と、南方から海岸伝いに北上してきたY-DNA C2の2集団が中国大陆に到来したと推定されている。

ヒトには23対の染色体があり、23番目が性染色体で、男性は長いX染色体と短いY染色体を持ち、女性はX染色体を2本持っている。Y染色体は男性のみにあり、そのY染色体の中のDNA (Y-DNA) は男系で同じものが継承されていく。しかし、ときにY-DNAのある部分に生存に影響のない突然変異が生じることがあり、その特

定の突然変異をたどることで、現生人類の男性の拡散ルートを推定できる。

現生人類がユーラシア大陸に進出した後、初期に分岐したY-DNA C、Y-DNA D、Y-DNA Eは古代遺伝子と称され、このうちY-DNA CとY-DNA Dは、ユーラシア大陸の東方に拡散し、Y-DNA Eは地中海方面に拡散していった。Y-DNA Dは日本人の男性の約4割を占めるタイプで、とても重要であるが、混乱を避けるために、あとで触れる。

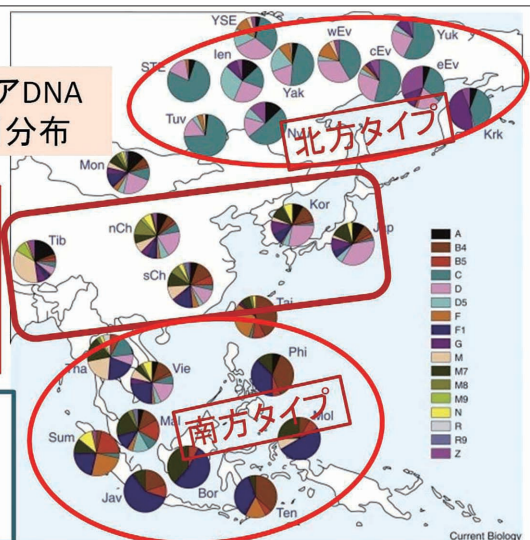
現生人類がアフリカで誕生し、世界中に拡散したことは、女性のミトコンドリアの中のDNA (MtDNA) の研究によって1980年代後半には明らかになっている。ミトコンドリアは、ヒトのはるか昔の祖先が単細胞生物であった段階で細胞内に入り込み、共生関係を続けてきたもので、動物の活動エネルギーの大部分を生産している。精子の中のMtDNAは、受精段階で分解してしまうため、MtD

図2

ミトコンドリアDNAのタイプ別分布

東アジアでは北方タイプと南方タイプ、そして間に混合タイプ

日本、韓国、華北、華中のタイプ別比率の近似も注目



原図は[https://www.cell.com/current-biology/fulltext/S0960-9822\(09\)02067-3](https://www.cell.com/current-biology/fulltext/S0960-9822(09)02067-3) 赤枠は諏訪付加

NAは女性から女性に伝わる。MtDNAはY-DNAよりも構造が単純で数も少ないので、その解析はY-DNAよりも10年ほど早くなされた。MtDNAの研究でも、東アジアの初期の現生人類は北方と南方から到来して合流したことが確認されている。

東アジア各地のMtDNAのタイプ別割合を示した図2を見ると、東アジアでは北方タイプと南方タイプと、その

間に両者が混合したタイプの三つの横長の帯を確認できる。しかも、日本と朝鮮半島の人々のタイプ別の割合は極めて似ており、華北、華中の人々のタイプ別比率ともかなり似ている。この三つの横長の帯は、温帯とその北の亜寒帯、南の亜熱帯に大きく分かれている。つまり、このM+D+NAのタイプ別の分布は、気候環境に順応した分布で、気候環境を反映した植生に基づく住み分けがなされた結果と想像できる。

人類史においては、戦争などで他民族を征服するのはもっぱら男性で、征服された集団の男性の遺伝子は、その地域に残らないことも多い。したがって、女系で伝わるM+D+NAの分布の方が、その地域における古い人々の姿を反映している可能性が高い。

植生の違いに起因する植物性食料の違いと人々の住み分け

日本から華中・華北は温帯性の落葉広葉樹や常緑広葉樹が優勢な地帯である。それに対し、福建省あたりからさらに南の東南アジアは、亜熱帯性の常

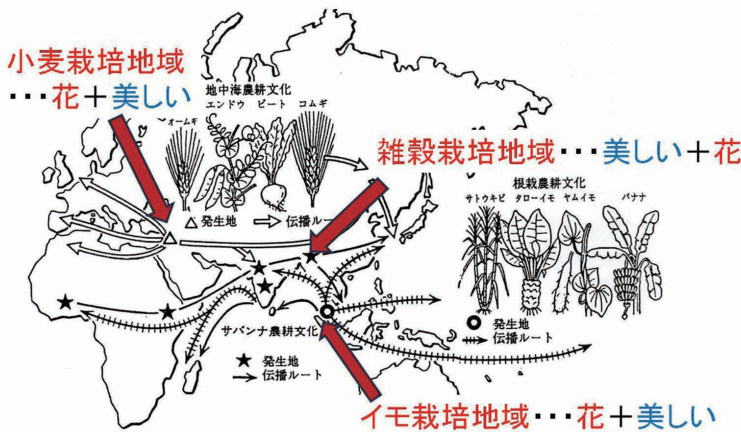
緑広葉樹が優勢である。一方、北方では東の方は針葉樹が優勢であるが、乾燥した西の方では草原地帯が広がっている。北方の針葉樹林帯や草原地帯では、直接人間が食料にできる植物性の食料は乏しく、狩猟が主要な食料獲得手段だった。しかし、後には牧畜が始まり、家畜の肉やミルクへの依存度が高まっていった。

中国大陸に到達した初期の集団は、狩猟採集生活をしていたが、その後、農耕を始めて植物性食料への依存度を高めていった。亜熱帯性の常緑広葉樹林帯では、バナナなどの果物の採集とともにイモ栽培を始めるようになり、そのような食べ物に慣れると、他の植生の場所にもあまり移動しなくなる。温帯性の植生の下では、クリやドングリなどの採集とともに、やがてアワ・ヒエなどの雑穀栽培が始まった。この地帯での植物性食料に慣れ親しんだ人々も、他の植生の場所にもあまり移動しなくなった。移動するとしたら同じような植生が広がる東西の带状の地域である。

ドングリや雑穀といった硬い食料を食べていた人々と、果物やイモ類のような柔らかい食べ物を食べていた人々が長期間にわたって住み分けていたことは、北方の中国人と南方の中国人の歯の形質の違いからも推定されている。そして、住み分けが長時間に及ぶことで、三つの横長の帯の間では言葉の違いも生まれたはずである。

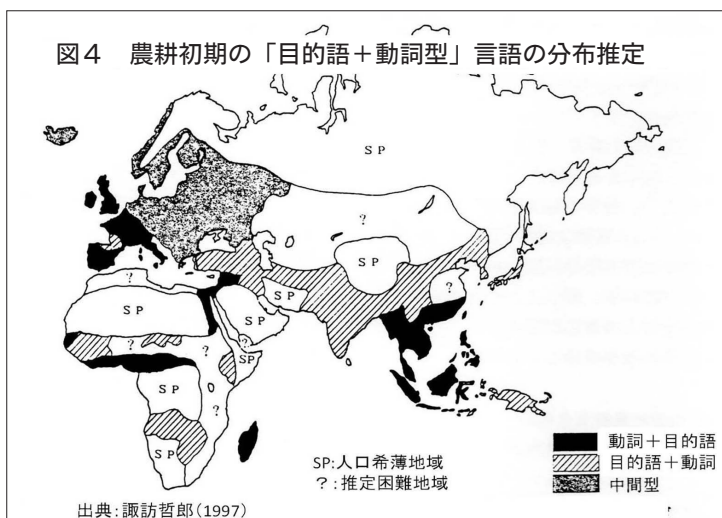
図3は、中尾佐助氏が1966年に

図3 中尾佐助氏が提示した農耕文化の起源地と基本的な語順（中核語と修飾成分の語順）



中尾佐助(1966)の原図に諏訪が赤字・青字付加

図4 農耕初期の「目的語+動詞型」言語の分布推定



『栽培植物と農耕の起源』で提示した農耕文化の起源地とその拡散を示した図をベースにしている。農耕文化の名称をわかりやすいように、イモ栽培、雑穀栽培、小麦栽培と言い換えている。また、それぞれの農耕文化の担い手の言語の顕著な特色として、中核になる単語（中核語＝Head）と修飾成分（＝Modifier）の語順について、「美しい＋花」というか、それとも「花＋美しい」というかを例に挙げて加筆した。

中核語と修飾成分の語順が、そんなにはっきりと分かれるのか、と疑問を感じる方も多いであろう。

初期農耕文化の類型と語順の密接な関係

図4は、アメリカやオーストラリアという新大陸を除いた旧大陸、すなわちアフロユーラシア地域において、中核語と修飾成分の語順がどのようになっていくかの概略を示したものである。1990年代に刊行された『言語学大辞典』に収められた世界中の膨大な数の言語の、動詞と目的語の語順情報に基づく、古い時代の基本的な語順の分布推定図である。まず中核語と修飾成分の語順の分布図を描き、そこから砂漠や寒冷地、山岳地帯といった人口の希薄な地域や、民族の興亡が激しくて語順が定まらなかった地域を除外したり、民族移動の変遷を遡って修正したりしている。どのくらい正確かと言われると、正直なところ「大雑把です!」としか答えられない。しかし、「大雑把」であることを承知の上で眺めていると、まず、中尾佐助氏

が、サバンナ農耕文化と名づけた雑穀栽培文化の発生地、すなわち雲南からインド、そしてエチオピア高原からニジェール川上中流域がことごとく「目的語+動詞」の語順であることに気づく。また、中尾氏が根栽農耕文化と名づけたイモ栽培文化の発生地、すなわち東南アジアからアフリカのヤムベルトと言われるイモ栽培地帯やマダガスカルがことごとく「動詞+目的語」の語順となっていることも見えてくる。

言語の発展については、インド・ヨーロッパ語のような牧畜民の言語を中心に考えるのではなく、農耕民族の言語をもっと重視すべきであって、語順のような言葉の癖の中にその地域の基層文化を探る手掛かりがあると考えたのが橋本萬太郎氏であった。橋本氏は、「中核語+修飾成分」という語順を順行構造、「修飾成分+中核語」の語順を逆行構造と名づけており、世界中の言語はそのどちらかに統一される傾向があると指摘している。私自身も『言語学大辞典』に記載されている膨大な言語の例文から、「確かにその傾向が

表1 初期農耕文化と語順と神話の緩やかな対応

初期農耕文化	語順と思考様式	創世神話と思考様式
地中海農耕文化 (小麦栽培文化)	順行構造 中核語＋修飾成分 	神が原初に存在し 大地や生物を創造 
サバンナ農耕文化 (雑穀栽培文化)	逆行構造 修飾成分＋中核語 	混沌から大地や生物が 生まれ世界が完成 
根栽農耕文化 (イモ栽培文化)	順行構造 中核語＋修飾成分 	大地は初めから存在 女神が殺され作物に 

初期農耕文化と作物起源神話と語順に共通する思考様式

あるのは間違いない」と感じている。橋本先生の指摘に触発され、各地の基層をなす言語の語順の分布図を描いてみたら、初期の農耕文化の類型と語順にかなり密接な関係が見えてきたということである。では、なぜであろうか。

大事なものを先に言うか後に言うかという言語の語順は、おそらくは人々の思考様式と関わっている。そして、思考様式という点では、生きていくために食料をどのように確保するのが重要であったはずである。そのような仮定に基づいて、農作物をどのように人々が手に入れたかを物語る作物起源神話と語順を初期農耕文化ごとに並べてみたのが表1である。つまり、最も重要なものが最初にあって、付属的な要素が後から加わるか、それともさまざまな要素が徐々に積み重なって、最後に全体が完成するか、という違いを示している。まず創造神がいて、さまざまなものが作られる一神教の思考様式と、混沌の中からさまざまなものが生まれてきて、最後に世界が完成する混沌神話の思考様式を比較するとわかりやすいであろう。

一神教はまずメソポタミアから地中海沿岸の麦栽培地帯に広がっていったし、混沌神話は雑穀栽培地域にしばしば見られる。イモ栽培地帯に分布する女神殺し神話は、殺した女神

を分断して地中に埋めることで、さまざまな作物が生まれるというストーリーである。イモ類はいくつかに切って作付けをすれば簡単に数倍のイモを収穫できる。それに対して、雑穀類は、粒が落ちる前に小さな実を集め、脱穀し、食べられるようにするには大変な手間暇がかかる。さまざまな要素が徐々に積み重なることで世界が完成する混沌神話は、手間暇のかかる作業を辛抱強く続けることで、食べ物を手に入れることができる雑穀栽培と親和的である。

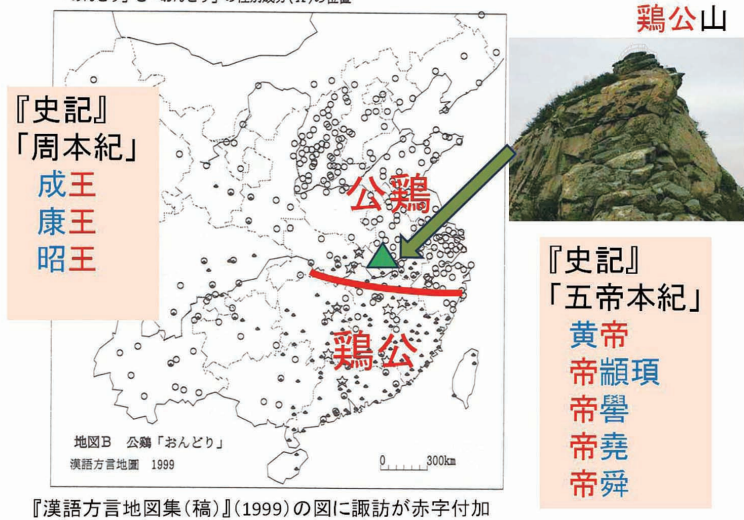
「鶏公」か「公鶏」か、「帝堯」か「成王」か、そして太陽は男性か女性か？

以上の初期農耕文化と語順の対応関係を意識しながら次頁の図5を見ていただきたい。

橋本氏は中国大陸における「かわ」の言い方が、北方では黄河の「河」、南方では長江の「江」であることを指摘するとともに、「おんどり」のことを「オス＋鶏」というか「鶏＋オス」というかが、長江のやや南を境にして分けられると指摘

図5 「鶏+オス」 or 「オス+鶏」

「めんどり」と「おんどり」の性別成分(X)の位置



『漢語方言地図集(稿)』(1999)の図に諏訪が赤字付加

な言い方であるのに対し、「成王」「康王」は北方的な言い方となっている。それでは、北方的な要素が南を覆うことでこのような違いが生じたのであろうか、それとも、南方的な要素が境界線を越えて北方に侵入した結果であらうか。

また話が広範囲になってしまいが、ユーラシア大陸の南方と北方における「太陽」と「月」の性別を見ると、「太陽」が北方では女性、南方では男性という大きな傾向が存在する。ヨーロッパの言語では名詞に性別があるものが多く、アルプス山脈の北の、例えばドイツ語では「太陽」= die Sonneのように女性。アルプスの南の、例えばイタリア語ではil soleのように男性である。ユーラシア東部の言語には性別はないが、神話を見ると北方の神話では太陽が女性、南方の神話では太陽が男性となっているものが多い。日本の場合、太陽神アマテラスが女神で、月の神ツクヨミが男神であるので、北方的と言える。漢民族の場合、太陽の「陽」

は男性を象徴しているので南方的である。南方的な要素が境界線を越えて北方に侵入した可能性が大きい。

これまで、気候環境を反映した植生や初期農耕の様式からも東アジアは北方と南方とその間の三つの地帯に分かれることを述べてきたが、言語についても2本の境界線によって三つの地帯に分かれる。北の境界線はほぼ万里の長城あたりで、南の境界線は長江のやや南方にある。その2本の境界線を境にして、南の方はCVC型の単音節言語で、おんどりを「鶏公」という「中核語+修飾成分」の順行構造。万里の長城より北の地域では日本語と同じような多音節言語で「修飾成分+中核語」の逆行構造である。その中間の地帯がやや複雑である。一応、中国語は単音節言語なのだが、「北京語」のような北方方言は、単音節言語でありながらやたらと2音節を好む癖がある。南方では「日」「月」「石」と1音節で済んでいるのに、北方では「太陽」「月亮」「石頭」と2音節語にしている。おそらく、北方方言は声調が少なく、同音

異義語が多いことも関係しているの
 であろう。語順についても、基本は「動
 詞＋目的語」で「中核語＋修飾成分」
 の順行構造であるが、「おんどり」は
 「公鶏」と言うし、「形容詞＋名詞」が
 基本で、「修飾成分＋中核語」の逆行
 構造も混じっている。

東アジアの言語は二項対立か それとも三つの言語文化圏か

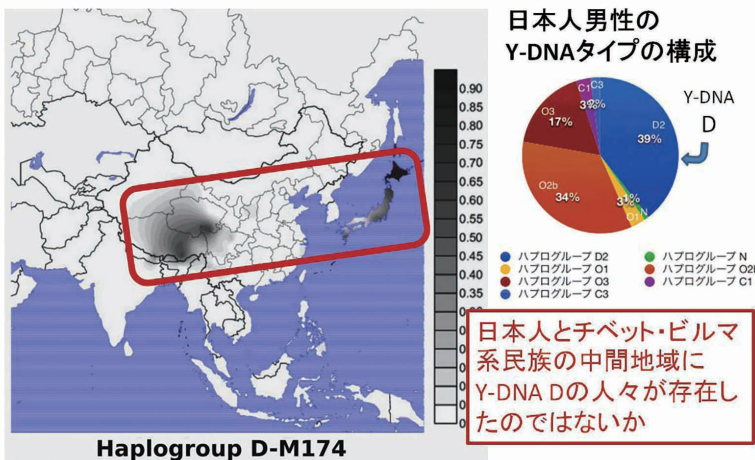
東アジアにおける言語グループを分か
 つもつとも大きな境界線は、万里の長
 城とおおむね重なる位置にある。この境
 界線の北方にはモンゴル諸語に代表され
 る膠着語的多音節語があり、その南方
 には中国語や東南アジアの諸言語に代
 表される孤立語的単音節語が存在する。
 牧畜民の言語と農耕民の言語の境界線
 と言い換えてもいいかもしれない。

その一方で、橋本氏は、「中国語は
 決して一枚岩ではない」と述べるととも
 に、東アジアの言語はモンゴルから東南
 アジアまで二項対立となっており、二
 項対立の多くの要素の境界が長江のや
 や南に集中していることも指摘している。

しかし、「河」「江」の他に「川」もあ
 り、多音節言語文化圏、単音節言語文
 化圏の他に2音節言語文化圏も設定で
 きそうなので、必ずしも二項対立とは
 言い切れないのではなからうか。

二項対立ではなく、やはり初期農耕
 段階の生態環境に基づく三つの言語文
 化圏がもとあったと考えたくなる
 理由の一つは、説明を後回しにする
 した古代遺伝子であるY-DNA Dの

図6 Y-DNA Dの分布



存在である。東アジアにおけるY-D
 NA Dは図6のように、日本人とチ
 ベット・ビルマ系民族に多く、その中
 間の地域（中国）が抜けている。何ら
 かの理由で中間地域にいた男性集団が
 持っていたY-DNA Dが消滅した可
 能性が考えられる。中間にあったY-D
 NA Dが消滅したと推定したくなる
 理由は、東アジアにおけるY-DNA
 A Oの広がりにある。Y-DNA A O
 は後の時代に拡大してきた新興遺伝
 子で、次頁の図7に示したように、
 今日、東アジアを席卷している。

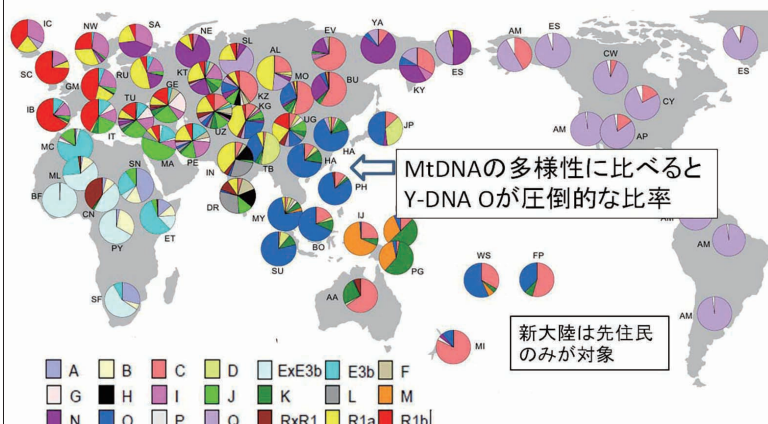
では、Y-DNA Oは東アジアで
 どのように拡大していったのである
 うか。有力説に従えば、Y-DNA
 Oの古い移動は東南アジアから中国
 の海岸沿いを北上して朝鮮半島から
 日本にまで達し、その後、北から南
 に戻る動きが見られるという。Y-D
 NA Oの初期の北方への拡大は、
 水田稲作とともに北上して長江文明
 を築いた集団によるものと推定され
 ている。1980年代から90年代に
 は長江流域における古代遺跡の大規

まとめと補足

以上の話を、模式図化した図8を用いて、言葉を補いながらまとめてみる。東アジアに最初に到来した現生人類は、

模な発掘調査の報告が続々となされ、良渚文化や屈家嶺文化といった長江文明は黄河文明に匹敵するという評価が定着している。長江文明を支えたのは言うまでもなく稲作である。

図7 男系で伝わる新興遺伝子 Y-DNA O が環境の制約を超えて東アジアに拡大



原図は<https://dna-explained.com/2013/01/24/what-is-a-haplogroup/>

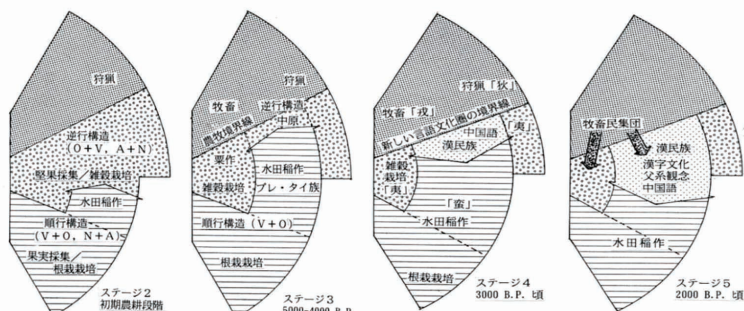
北方から南下した集団と、南方から北上した集団であったが、その後、生態環境と初期農耕形態に対応した北方型と南方型と中間型の三つの帯状地域を設定できる。亜寒帯気候下で牧畜文化が形成された北方地帯、温帯気候下で雑穀栽培文化が生まれた中間地帯、亜熱帯気候下でイモ栽培文化が生まれた南方地帯の三つの帯である。

水田稲作を携えたY-DNA Oの集団は北上して長江文明を生み、さらに北上して黄河文明を持つ集団と合流して漢民族文化を誕生させる。その後、漢民族は北方から流入する牧畜系民族の影響を受けて漢民族文化を南方に伝播させる。漢民族自身も南方へと拡大していく。

Y-DNA Oの存在と2音節語を好む言語文化圏の存在を考えると、東アジアの基層文化としては、三つの文化圏を設定した方がよいが、図8で表現したように南からの波と北からの波が強烈だったので、中間地帯の言語の癖

図8 東アジア基層文化圏を分断した二つの波

Y-DNA Oと順行構造言語を有する集団が稲作農耕とともに中国東部を北上した。その後、北方の民族集団と南方の民族集団の接触融合によって漢民族が誕生。異なる文化の衝突により活性化した漢民族は南に勢力を拡大し、南方の異民族を漢民族化していった。



諏訪哲郎(1996)所収の図より抜粋

が希薄化してしまっており、東アジアの言語文化が限りなく二項対立的な様相であることは、橋本氏の指摘の通りであろう。

東アジアの集約的農耕という生産様式を背景に、漢民族は宗族制度のような男性中心社会を拡大させ、他集団を支配し、融合していった。同様のことは朝鮮半島でも日本列島でも生じており、日中韓ともにそれぞれ単一民族的

な思考が支配的になっていった。そして、今日もなお単一民族史観は残存し、互いに対立色を深めている。

その一方で現在、日中韓3か国では、超少子化といってよい事態が進行している。ヨーロッパ諸国では、移民の受け入れという「多文化共生」の道を選んでいるが、日中韓3か国は移民の受け入れに消極的である。日本の生産年齢人口比率は世界で最低水準であるが、それ以上に驚くべきことは、2011年時点の生産年齢人口比率で上位に位置していた中国、韓国が、2060年には大幅に順位を下げると予測されていることである。このような状況の中で、私たちはどのような方向に向かうべきであろうか。単一民族的な思考を廃し、男性優位な諸制度を見直し、多文化共生による再活性化が必要なのではなからうか。

最後に、付け足しの話を一つ。

前述のように、2音節言語文化圏を設定したくなる理由の一つは、日本語

の副詞にある。日本語の副詞には、どんな、ずんずん、がんがん、といった同音反復型と、しつかり、すつかり、ひっそり、といった「□っ□り型」の2大類型が見られる。前者が2音節であることは言うまでもない。それに対し、「□っ□り型」は、単音節の語幹に副詞を作る後置詞「り」がくつついたものと説明できそうである。多音節化しているが、語幹は間違いなくCVCの単音節で、2番目の母音は、漢字の日本語音がCVCの後ろに母音を付加しているのと同じである。日本の副詞の2大類型の一つが2音節であることは、東アジアの真ん中に2音節言語文化圏が存在することの傍証になりそうである。中国語の豊富な「同義反復熟語」と同様に、この副詞の2大類型も日本語を豊かなものになっている。多文化共生の賜物と言えるであろう。

改めて、「融合」を目指すのではなく「共生」を目指すべきと感じている。

主要参考文献（出版年次順）

中尾佐助『栽培植物と農耕の起源』岩

波新書、1966年。橋本萬太郎『言語類型地理論』弘文堂、1978年。『漢語方言詞匯』北京・語文出版社、1995年。諏訪哲郎「言語から見た東アジアの民族移動」『講座 文明と環境』（第5巻）朝倉書店、1996年、所収。諏訪哲郎「長江文明と言語類型地理論」『橋本萬太郎紀念中国語学論集』内山書店、1997年、所収。遠藤光暁（代表）『漢語方言地図集（稿）』（科研費報告書）1999年。（2025年2月21日・公開講演会）

筆者略歴（すわ・てつお）

学習院大学名誉教授、理学博士。専門領域は文化地理学、環境教育学。日本環境教育学会元会長、過去25年にわたり日中韓の環境教育交流に注力。主著に『西南中国納西族の農耕民性と牧畜民性』『学校教育3・0』。編著に『現代中国の構図』『環境教育辞典』『事典 持続可能な社会と教育』。